

戦争遺産を活用したまちづくり・ひとづくり事業

— 今に残る加西市鶉野飛行場跡 —

株式会社オオバ 大阪支店 村松 雄一郎

論文要旨

兵庫県加西市鶉野町に位置する鶉野飛行場は、太平洋戦争時に姫路海軍航空隊の中核施設として建設された飛行場である。戦後73年経った今も全長1,200mの滑走路がほぼ当時のまま残されており、国内で唯一現存するのはここ鶉野飛行場だけである。250haの広大な敷地には防空壕、機銃座なども数多く残されており、今に残る貴重な戦争遺産を活用した観光まちづくり・ひとづくりの事業手法について検討した。

キーワード：戦争遺産の保存・継承と活用、ミュージアム、地域活性化、観光振興

まえがき

本事業が実現する運びとなったきっかけは、現在郷土戦史研究者である上谷昭夫氏（兵庫県高砂市在住 昭和13年生まれ）が勤務していた会社が滑走路近くに営業所を開いたことがきっかけとなり、上谷氏はここで何があったのか、その史実について平成5年から本格的に調査をはじめた。しかし、市には資料が残されておらず、戦争体験者への聞き取り調査や防衛省に出向き資料を収集するなど、20年以上にもおよぶ地道な調査活動により、姫路海軍航空隊の全容が明らかとなった。

これがきっかけとなり加西市が平成26年度より事業化し、平成27年度「鶉野飛行場跡地周辺工事計画策定」、平成28年度「鶉野ミュージアム及び地域活性化施設基本計画」、平成29年度「鶉野ミュージアム基本設計及び地域間連携事業」において、今に残る貴重な戦争遺産等を活用した観光まちづくりについての整備手法の検討を行った。

1. はじめに

兵庫県加西市鶉野町に位置する鶉野飛行場は、太平洋戦争時、日本にとって不利な状況になりつつある昭和18年（1943年）10月、姫路海軍航空隊の中核施設として建設された飛行場である。

姫路海軍航空隊は、当時の加西郡に250haという広大な敷地に滑走路（3本）、駐機場、格納庫、兵舎、その周辺には防空壕や機銃座などが点在する旧軍施設である。戦後73年経った今も全長1,200mの滑走路がほぼ当時のまま残されており、国内で唯一現存するのはここ鶉野飛行場だけである。

当時この鶉野には、飛行機の組立工場もあり川西空機（株）姫路製作所 鶉野組立工場では局地戦闘機「紫電」

466機、「紫電改」44機の最終組立が行われ、試験飛行のためこの滑走路が使われていた。参考文献¹⁾



写真-1 現存する滑走路¹⁾



写真-2 紫電改²⁾



写真-3 巨大防空壕

2. 戦争遺産の保存・継承と活用

姫路海軍航空隊では、パイロットになるための訓練が行われ、練習機として「九七式艦上攻撃機」が使われていた。訓練を積んだ若き隊員たち（最年長の隊長37歳、17～25歳までの青年）で編成された特別攻撃隊「白鷺隊」は、昭和20年（1945年）の沖縄戦に出撃し、63名の若者が戦死したと記録されている。参考文献¹⁾



写真-4 出撃前のパイロット³⁾

上谷氏は「史実を風化させず、次世代に記録として残すのが戦争体験者の責務だ」と語り、平成11年に多くの寄付により滑走路沿いに「鶴野平和祈念の碑苑」(写真-5参照)を建立、平成26年には小規模ではあるが「鶴野飛行場資料館」を開館し、鶴野平和祈念の碑苑保存会(現在、一般社団法人鶴野平和祈念の碑苑保存会以降保存会)が中心となり、次世代に継承する活動を続けている。



写真-5 鶴野平和祈念の碑苑

25年にもおよぶ調査は現在も続けられ、加西市は、平成26年度に鶴野地区における都市再生計画事業を立案し、①鶴野飛行場跡地及び周辺の戦争遺産を一体とした屋外ミュージアムとしての観光整備、②地域の歴史資源を通して市内外の観光客と地域住民との交流の場を創出することを目的とし、年間観光誘客数を現在の8,000人から整備1年後には1万6,000人、将来的には100万人とすることを目標としている。

鶴野飛行場跡周辺の保存と活用について保存会の意向をもとに、地域住民とのワークショップを開催し計画内容を取りまとめた。計画では、来訪者への安全を確保し歴史遺産を散策する「歴史遺産郡ゾーン」、滑走路は一部保存しイベント利用などで活用する「レクリエーションゾーン」、地域の防災拠点となる「防災ゾーン」の3つのゾーンにより構成するとともに、紫電改のレプリカを展示する資料館「鶴野ミュージアム(仮称)」を計画した。

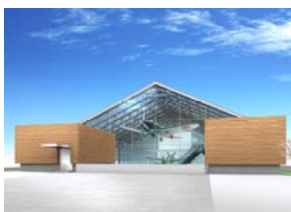


図-2 鶴野ミュージアム
(いるか設計集団作成)



図-3 展示イメージ
(乃村工藝社作成)



写真-6 爆弾庫跡(整備前後)

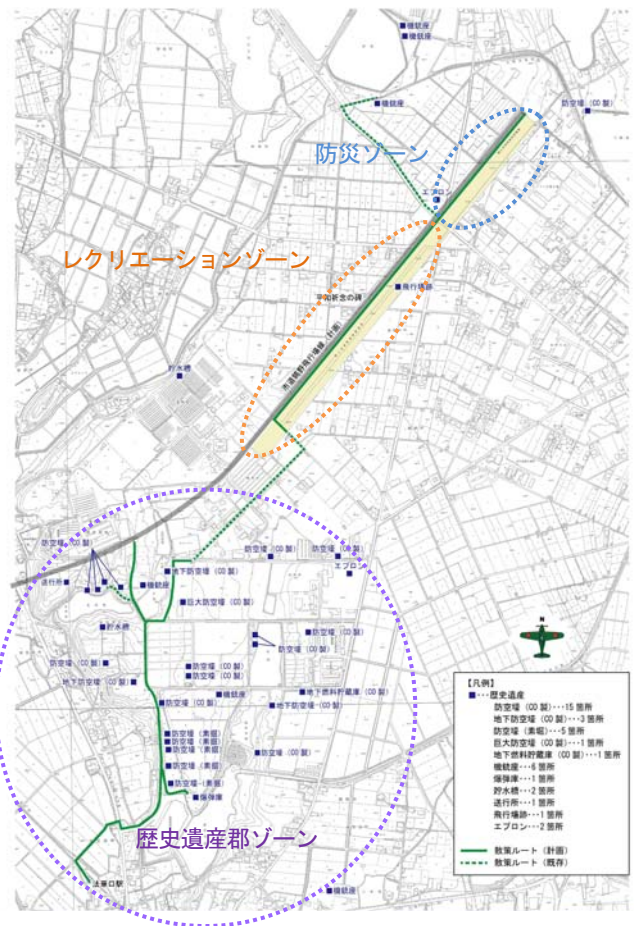


図-1 歴史遺産分布図・ゾーニング

3. 課題と解決策

(1) 観光客100万人達成に向けて

年間観光誘客数100万の可能性についてであるが、類似する博物館で最も来館者数が多い広島平和記念資料館で174万人(平成28年度)、次いで呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)の95万人(平成28年度)であり、同規模(延べ床面積2,000㎡程度)の博物館では10万人前後に留まっている。

このような状況からミュージアムを建設しても100万人達成には知名度、展示品、施設規模などの課題があることから、加西市の特産品を販売する地域活性化施設「道の駅」と併設し、観光振興の拠点施設とすることで、地域経済・雇用の活性化・観光客の誘致にも期待できる。



図-4 道の駅イメージパース

(2) 集客力のあるミュージアム

ミュージアムの多くは常設展示の質もさることながら、企画展での集客が左右される傾向が強いとされ、質と話題性が高い企画展が集客力を発揮し、総来館者数に大きく貢献している。引用文献²⁾

鶴野ミュージアムの来館者数は、年間 10 万人を想定しているが、これを持続または増加させるためには、企画展をどう展開していくかが課題である。

展開手法として、ミュージアム開館までに自治体間連携として近隣の兵庫県姫路市、姫路海軍航空隊と関連が深い大分県宇佐市、鹿児島県鹿屋市との4市による連携を図り、民間団体間連携では、同様に姫路海軍航空隊と関連が深い「宇佐市平和資料館」(大分県宇佐市)、「筑波海軍航空隊記念館」(茨城県笠間市)との3施設による連携を図る短期連携ビジョンにおいて、ネットワークを構築した。

更には、全国にある類似施設との連携も視野に入れ、12施設間での連携を目指す長期連携ビジョンを策定し、他館から展示品を貸与し、戦争や平和に関する様々なテーマの企画展が展開できるよう広域的な地域間連携を目指している。



図-5 地域間連携ビジョンの展開

(3) 語り部の継承-ひとづくり

戦後 73 年が経ち、戦争の時代を生き抜いた人たちが減ってきている。国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口で見ると 2025 年では総人口の 6.2%、2050 年には 0.1% になることが見込まれ、32 年後には戦争体験世代がわが国にはほとんど皆無になることが予想されている。ここ加西

市においても戦争体験者の高齢化が進み、薄れゆく記憶をどう語り継いで行くのが急務の課題である。

これを受け、保存会では展示会において戦争体験聞き取り調査の実施や、姫路海軍航空隊の隊員や関わった方の親族と面談するなど情報収集を続けている。また、歴史ボランティアガイド育成講座を開講し、名ガイド役である上谷氏の後継者を育成中である。



写真-7 上谷氏によるガイド



写真-8 ボランティアガイド育成講座

貴重な戦争遺産が次世代に語り継がれるよう、近隣市町村の小中学校での平和教育、シンポジウムやプロモーション動画、イメージキャラクターの制作など普及啓発活動にも努めており、様々なかたちで着実に後世に受け継がれている。

あ と が き

本論文をまとめるにあたり、一般社団法人鶴野平和祈念の碑苑保存会の三宅通義代表理事、上谷昭夫理事に資料の提供および貴重なご助言をいただきました。本事業の発注者である加西市都市整備部大型プロジェクト推進課様には執筆に際しご理解、ご協力をいただきました。ミュージアム計画については(株)乃村工藝社様、いるか設計集団様にご協力いただきました。深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 加西・鶴野飛行場資料館 図録集 2014.12.7
発行：鶴野平和祈念の碑苑保存会 監修：上谷昭夫
 - 2) 月刊レジャー産業資料 2017.8 No.611 38p
発行：総合ユニコム株式会社
- 写真提供 1) 「加西・鶴野飛行場跡」加西市
写真提供 2) 小西清文
写真提供 3) 潮書房光人新社